論文要旨

1.　孫 宇軒（ソン ウケン・中国）

「中国ローカルコンビニの現状と展開　－日系コンビニとの比較から－」

キーワード：中国ローカルコンビニ、日系コンビニ、中日比較、社会変化に応じた対応

要旨：現在中国ではネット通販の急成長により、実店舗中心の小売業の経営は厳しくなっている。それとは対照的に、コンビニの売上はここ数年連続で小売業業態の中で最高の成長率を維持している。中でも、日本から導入された日系コンビニの数が急増しており、売上高も中国のを大きく上回っているため、中国ローカルコンビニには様々な改善すべき点があり、その利便性も新しい次元へと進化すべきであると思われる。

留学生として日本に来て以来、コンビニをより頻繁に利用するようになったため、コンビニについての興味が増し、中国ローカルコンビニについて研究することに決めた。

本論文は、まずコンビニの概要について概説し、次に、中国における日系コンビニとの比較から、中国ローカルコンビニに足りない点を明らかにする。最後に中国ローカルコンビニの社会変化に応じた対応について考察する。

時代の変化とともに、消費者がコンビニに求めるニーズは多様化している。ネット通販や日系コンビニの発展を背景として、コンビニ業態の競合が激しくなりつつある中で、本論文が中国ローカルコンビニの業態の新しい方向性の模索や、新規ニーズ開拓に役立てばと望んでいる。

2.　ヘル・フィオナ　（オーストリア）

「日本人の知らない「エリザベート」　－ウィーン版ミュージカルと宝塚版の比較－」

キーワード：　ミュージカル、比較、「エリザベート」、ウィーン版、宝塚歌劇団

要旨：数年前、私はウィーン大学の授業で初めて宝塚歌劇団のことを知った。その歌劇団に興味を持ち調べると、演目は日本の歌劇だけでなく、ウィーンの有名なミュージカル「エリザベート」（1992 年初演）も何度も上演をされていると知ったため、それのウィーン版と宝塚版を比較したいとその時から思っていた。

この論文の調査・分析には、1996 年の宝塚歌劇団の初演と 2005 年のウィーン版の DVD を使用した。第 1 章は、宝塚歌劇団とウィーンの劇場の制度を説明し、「エリザベート」の成立も明らかにする。第 2 章で「エリザベート」の評価と日本へ渡った経緯を述べる。それを踏まえて第 3 章では、歴史的な人物をモデルにした「エリザベート」の内容を実際の事実と照らし合わせ、更にウィーン版と宝塚版の比較をする。主に歌詞の翻訳と、それに伴う役の変化を比較する。

比較を行った結果、ウィーン版と宝塚版のストーリーの冒頭と結末は同じであるが、歌詞や役の変更により、その間に描かれる場面には異なる点が多いことが分かった。

3.　タンプラバポーン・パッタラーポーン（タイ）

「和製英語に対する意識　－語構成と年代差に注目した分析－」

キーワード：和製英語、カタカナ語、語構成、省略型、意識

要旨：和製英語とは、英語の単語を組み合わせて創造された語句・表現、または意味や発音が日本的に変化した語句・表現で、英語らしく聞こえるが、実は英語母語話者には通じないもののことである。日本語を勉強し始めた頃から、和製英語というものに興味があったため、研究したいと考えた。

　外来語も和製英語も日本の日常生活の中でよく使われている。しかし、外来語と和製英語の違いを日本人はどれくらい意識しているのだろうか。本研究では、語構成と年代差によって違いがあるかどうかを検証することを目的としている。まず、和製英語の定義、使用目的、語構成の分類を紹介し、次に、和製英語が生じた経緯を歴史的に説明する。そして、日本人の和製英語に対する認識と意識のアンケート調査の実施と結果を報告する。

　その結果、和製英語だと分かりやすい語構成は省略型であることが明らかになった。また、高齢者は若年者より和製英語の認識率が高かったことから、年代差、さらに、英語との関わりかたが日本人の和製英語の意識に関係があることが分かった。

4.　唐 淼（トウ ミョウ・中国）

「ジョバンニのアイデンティティの拡散と形成　－成長物語としての『銀河鉄道の夜』についての考察－」

キーワード：『銀河鉄道の夜』、成長物語、アイデンティティ、青年期

要旨：宮沢賢治の名作『銀河鉄道の夜』は、日本のみならず人類の重要な文化財であるものの、意味深く謎の多い作品なので、理解しやすいとは言えないだろう。日本語と日本文化をあまり知らない人々にこの作品の魅力を伝える場合、「成長物語」という側面から『銀河鉄道の夜』を読み取ることが適切であると考え、本稿では心理学者エリクソンの発達段階理論に基づき、「アイデンティティ」の概念を導入し、青年期にある主人公ジョバンニのアイデンティティの拡散と形成について考察を行った。

　本論では、まず、第 1 章で、「成長物語」という用語を説明し、『銀河鉄道の夜』の改稿推移と成長物語への変容を考察する。次に、第 2 章では、エリクソンの発達段階理論と「アイデンティティ」の概念を紹介し、ジョバンニが青年期にあることを明らかにする。更に、第 3 章では、ジョバンニとカムパネルラとの関係、ジョバンニの自立と職業選択、ジョバンニの精神的変化と目指す道の樹立などの方面から、ジョバンニのアイデンティティの拡散と形成を考察し、成長物語としての『銀河鉄道の夜』の展開を究明する。

5.　金 娜延（キム ナヨン・韓国）

「韓国・大田（テジョン）市における路面電車（トラム）導入の是非　－ドイツ（フライブルク市）・日本（岐阜市）との比較から－」

キーワード：公共交通、路面電車、トラム、コンパクトシティー、日韓独比較

要旨：現在韓国では、各都市で、環境への影響や地域の活性化等に対する利点を理由として、路面電車の一種であるトラムの導入が計画されている。筆者の故郷である韓国・大田（テジョン）市もその都市の一つで、都市鉄道 2 号線設置計画の策定に際し、トラムを運行機種に導入するか否かについて、十数年もの間論争が続いている。

本論文は、大田市の都市鉄道 2 号線の設置について、公共交通機関として路面電車を活用しているドイツ・フライブルク市の事例と、それを廃止した岐阜市の事例を調査し、賛否の論争に一石を投じることを目的としている。

本論文では、まず第 1 章で、路面電車に関する基本情報を整理し、次に第 2 章で、フライブルク市と岐阜市の正反対の事例を紹介する。第 3 章では、大田市における都市鉄道 2 号線へのトラム導入計画の経緯を記し、さらにトラム導入の是非について検討する。

6.　趙 羽煕（チョウ ハキ・中国）

「中国人学習者の日本語有声・無声破裂音の習得実態についての考察　－上級者を中心に－」

キーワード：清濁、有声・無声破裂音、音声の習得、日本語学習者

要旨：世界各国の日本語学習者が日本語を勉強するとき、それぞれ困難を覚えているところがある。中国人日本語学習者にとって、清音と濁音の中で破裂音である「か・が」「た・だ」「ぱ・ば」は区別しにくい音である。しかし、中国人日本語学習者に対する日本語教育の現場では、清濁の音声的な違いである有声・無声の対立について詳しい指導が十分行われていない現状がある。私自身の経験では、文法や単語の知識を身に着け日本語のレベルが上がっても、清音と濁音の聞き間違いがよくあると感じていた。そのため、私は詳しい指導が行われなくても、学習時間が増えるにつれて有声・無声の弁別が自然に習得できるかについて疑問を持っている。

そこで、本論文では日本語専攻の上級学習者を対象とし、有声・無声音の知覚および発音の習得について調査を行った。その結果、長い学習時間を経た学習者にも誤聴、誤発音が見られたことから、自然に習得することがなく、指導と練習が必要であることが分かった。

7.　サボ・ダニエル（ハンガリー）

「相手との関係によって異なる謝罪表現の使い方　－日本語とハンガリー語の比較を通して－」

キーワード：謝罪表現、謝罪ストラテジー、上下・親疎関係、日本語とハンガリー語の比較

要旨：人々は日常生活の中で頻繁に謝罪するが、謝罪が人間関係や責任の取り方などの要因に密接にかかわるため、それを行うことは決して簡単なことではないと考えられる。相手との関係の捉え方は、文化や社会によって異なる。日本人に関して「いつも謝る」というステレオタイプがあるが、個人個人の相違があるため、この固定したイメージは必ずしも事実に基づいているとは限らない。しかし、このような観念ができたことには理由があるはずである。

日本語母語話者およびハンガリー語母語話者における謝罪の差異を探るために、上下・親疎関係を中心に「友人に貸してもらったものを壊した」場面や「親しい先生との約束を破った」場面などを設定した自由記述形式のアンケート調査を実施した。リアルな表現を収集したことから、日本語母語話者の方がハンガリー語母語話者より「すみません」や「ごめん」などの明確な謝罪表現を使用することが分かった。また、人間関係を修復するため、日本語母語話者は特に自分と同等の立場にいる相手に対して複数回謝罪表現を用いることが明らかになった。日本語における謝罪表現の研究を通して、日本人が相手との関係を重視する傾向があるという日本文化の特徴的な点も明確化できた。

8.　易 彤（イ トウ・中国）

「リメイク作品から見る日本・中国ドラマの時代性　－『東京女子図鑑』と『北京女子図鑑』を中心に－」

キーワード：ドラマ、リメイク、日中比較、時代性、「上京」

要旨：近年中国では、好評であった日本ドラマのリメイク版がいくつか出てきている。その中、中国で最近話題となっているのが、日本ドラマ『東京女子図鑑』のリメイク版『北京女子図鑑』である。リメイクされる過程で、現地化によって生まれ変わったドラマが映し出す、両国それぞれの独特な社会背景に興味を抱いていた筆者は、両作品の共通点の「上京」問題と相違点である実情による変化を分析し、ドラマの時代性について研究を行った。

本論文では、『東京女子図鑑』とそのリメイク版『北京女子図鑑』を比較し、ドラマの時代性について考察する。第 1 章ではまず、ドラマの定義とその機能、ドラマを構成する要素、そしてドラマの時代性について整理する。次に第 2 章では、原作の書籍から日本ドラマ『東京女子図鑑』へ、そして『東京女子図鑑』から中国ドラマ『北京女子図鑑』へ、どのような変容があるのかについて検討する。最後に第 3 章では、両作品の「上京」への憧れとそれがもたらしている問題点を指摘する。さらに、両作品の相違と両国の社会背景を関連づけて考察し、『東京女子図鑑』と『北京女子図鑑』の時代性に言及する。その結果、ドラマをリメイクするとき、時代性に着目し、適切な改編をする重要性が明らかになった。本論文がドラマの「越境」に役立てばと望んでいる。